

平仲説話の展開と平仲物語

目加田, さくを
福岡女子大学教授

<https://doi.org/10.15017/12395>

出版情報 : 語文研究. 1, pp. 51-66, 1951-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

平仲説話の展開と平仲物語

目加田 さくを

平仲(或は定)平貞文(或は定)に關する説話が何時頃發生し時代と共にどの様に展開して行つたか。それは何故か。又その展開史上平仲物語はどう位置してゐるであらうか。これらの問題について少し考へたいと思ふ。

平貞文は文獻によれば、寛平三年頃より地位らしい地位(内舍人)につき、延喜五年全六年には自邸で当代一流の歌人を招いて歌合を催し、或は院の有名な大井河御幸に供奉し、菊花にそへて歌を献上する等、彼の歌人生活において最も華やかな時期を遂げた。官も参河介、侍従、右馬助、左兵衛佐と歴任し延長元年九月二十七日歿したのである。猶、平仲物語の素材となつた事件で年次の明瞭なものは凡てが此の期に生起してゐる。又年次不詳のものも内容から推して恐らく同期と想定される。従つて寛平延喜約三十年間が彼の主たる活動時代であり且又所謂平仲説話の素因乃至素材となつたところの彼の行状、彼にかゝる幾つかの事件は彼の生涯中でも殊に此の三十年間に位置づけられるわけである。

第一期前期 貞文在世中……………923 延長元年迄

貞文存命中既に彼の行状、恋愛事件については種々の噂話が巷間に生れてゐたであらう。例へば次期の大和物語が依拠した説話は恐らく本期に口誦として存してゐたと想はれる。しかし、それを記録した説話は現存しない。実は物語的日記的家集が存在してゐたらうと推測され、それに平仲説話乃至平仲説話的なるものが数多内藏されてゐたと想はれるが、勿論その原本は伝らないから論及しないでおく。

本期の貞文關係文獻としては、日本三代実録・左兵衛佐定文朝臣歌合・古今和歌集等が現存するのみである。三代実録は茂世王が「好風貞文二人」に平姓を賜はる様願ひ出て裁下された次第を簡潔に記述したにすぎず、歌合も亦題名、勝敗、歌、作者名を列記したばかりである。古今集を手がかりとしても貞文關係の歌は純然たる和歌集的歌であり、そこに何等かの物語的にほひすら有つてゐない。とは、平仲物語で贈答歌となつてゐる「白川の」の歌、又如何にも贈答歌らしい

「まくらより」の歌等も「題しらす平貞文」として単独に收載されてゐる。集中貞文歌九首、詞書を有するもの三首、何れも一人称で簡潔な題詞たるにすぎない。以上貞文在世中は記述された平仲説話は現存せず、現存諸文献は平仲説話の片鱗をすらとどめてゐない事、唯次期の平仲説話(例へば大)の依拠は本期の巷間流布の噂話にある事と想はれるから、口誦としては平仲説話は本期に發生してゐたであらうと考へる迄である。

第一期後期 貞文歿後五十年⁹²⁴〜⁹⁷⁸ 延長元年より
天延元年迄

後撰和歌集、大和物語、平仲物語、伊勢集、躬恒集、等が此の期の貞文關係文献である。後撰集は此の期の歌集によくみられる物語化の傾向をもつて來てゐる。——詞書が題詞本來の歌中心主義から往々にして作者中心主義(焦点を歌から歌を詠んだ作者へ移行させ詠歌の動機、心理状態或は外面的事件等を語りたがる傾向)に傾くと同時に緊密な贈答關係の下に二首一単位として歌を收載したかの感がある。集中貞文歌六首。710(国歌大綱)は宛然歌物語の一章段であり、648〜649、696〜697、659〜660、544、545、581、532の悉くが贈答關係の下に收載されてゐる事は古今集と著しく異なる。710〜711(完全なる歌物語)を除く他の五組はいはゞ不完全なる歌物語と見られなくはない。臚げながら平仲にかゝはる或る事件を感じさせ

せる表現をもつ。平仲説話の影は明らかに後撰集に窺はれるが未だ平仲説話ではない。大和物語になると、○平仲閑院の御に絶えて後○平仲にくからず思ふ若き女を○平仲が色好みけるさかりに○本院の北の方、等の本格的平仲の物語が現れる。殊に「本院の北の方」は後撰集710〜711の事件と同一事件であり乍ら所伝を異にしてゐる。即ち此の事件(時平が國經北二人の)について当時少くとも二種類の噂話が存在してゐたと想はれる。伊勢集にも貞文と伊勢との交渉を物語る小物語がある。これは後撰集、大和物語ともになく、平仲物語には男の側より形成された歌物語がのせられ、これは女の側から(平仲物語の当該物語とほぼ年次を同じうして)不完全ながら物語を形成してゐるのである。平仲物語こそ純粹に貞文に關する歌物語四十篇を収めてゐる。その中嚴密に平仲説話(貞文に關する何等かの事件を語らう)を求むれば約十一篇(一、十九、廿三、廿六、廿八、廿九、卅、卅五、卅七、卅九)に過ぎないが、他の二十九篇にしてもとにかくにも貞文に關する或る事件乃至事柄、行動を述べようとする意圖を酌めば準平仲説話として取り扱ふ事も許されるのではあるまいか。以上一期後期に至つて始めて記録された平仲説話が現存するのであり、前期に少くとも口誦の平仲説話を想定し得るからして、汎く第一期(貞文存命中より歿後50年迄)に平仲説話の發生があると考へたいのである。以下發生期の平仲

説話の様相を眺めて見よう。

(一) その種類

出典名

(い) 武藏守の女出家の話

大和 平仲
物語(完)

(ろ) 国経北方との話 イ類
ロ類

大和 物語
撰集

(は) 伊勢(見つと言ひ
やりける女)との話

伊勢 平仲
物語二

(に) 閑院の御との話

大和 物語十
後撰
集

(ほ) 紀のめとの話

平仲
物語三

(へ) 失官事件

平仲
物語一

(せ) 思ひのほれる女との話

平仲
物語二
以下
二語
略す

(ち) もの言ひすさふる女との話

平仲
物語四

(り) 友との仲らひ

平仲
物語五

(な) 遣遙

平仲
物語六

(る) 志賀寺に参りあうた女との話

平仲
物語七

(そ) 全寺で他の局の女との話

平仲
物語八

(た) さくら花をみて口すさむ

平仲
物語九

(か) 女友達の話

(き) なほさらにもいふ女の話

(け) 七月七日河原に行きあうた女の話

(こ) 嵯峨野吟遊

(さ) こがらしのもりとよみし女の話

(せ) 男の為に苦しかるへき事をいふ女 以下
二語
略す

(じ) ほうしをかくしすえた女

(ち) 上達部めきたる人の女

(て) 菊の花苑におりたつ女

(と) 院へ菊献上

古今
集

(な) 国経との交遊

(は) 馬が放れて誤解される

(ら) 女友達の友達

(り) 近江守の女

(ろ) 逢坂の走井にてあひし女

(は) 忍びてしれる人

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

平仲

- (1) さがなものゝ母 平仲
 - (2) 〇名をかたられる 平仲
 - (3) 〇たのもし人のとりもつ縁 平仲
 - (4) 山寺へゆく 平仲
 - (5) ことにも思はぬ女 平仲
 - (6) ものいひすさふる人 平仲
 - (7) 〇心中に切なく思ふ人と野遊をする 平仲
 - (8) 春を限りと散る花のごと仇なる女 平仲
 - (9) 津岡遣遙 平仲
 - (10) 「ならの木」 平仲
 - (11) みすゝ生ひまさる女 平仲
 - (12) 富小路右大臣の母 平仲
 - (13) にくからす思ふ女を逐ふ話 大和物語
 - (14) おほつぶねとの交渉 後撰集
 - (15) 土左との交渉 後撰集
- 等、汎く準平仲説話も入れて考へれば約四十種を数へる事が

出来、厳密に平仲説話と限定しても約十二、三種（〇印）ある。

(二) その依拠乃至相互關係

後撰集所收貞文關係歌と大和物語当該説話とを比較する時、(1)「伝を異にするものゝ存在」―後撰集711と712（本院北方の贈）と大和物語（本院の北）とは異つてゐる。後撰では「昔せし」歌に北方の「現にて」の返歌がある。大和では同一人物間の交渉を扱ひ乍ら貞文が贈つた「春の野に」「ゆくすゑの」の二首をのせるのみで「そのかへしそれより前々も歌は多かりけれとえ聞かす」と言つてゐる。(2)それ〴〵別種の歌、話をもつてゐて共通歌の存しない事―後撰集所收の土左、おほつぶね、紀のめのと、本院北方等との贈答歌何れも大和物語に存せず、大和所收の閑院の御、武藏守女、若き女、本院北方等との贈答歌乃至贈答は何れも後撰集に收めてゐない。以上の二点により後撰、大和相互間に何等の相互關係はないと言へるのである。後撰集と平仲物語とを比較すれば、(1)648と649の贈答一連を除く凡ての後撰集所收貞文歌の平仲物語にない事、(2)648と649の贈答歌は平仲物語（第十一段）の四首一連の贈答歌と伝を異にしてゐる。648「我のみや」は平仲（第十一段）最初の男の「我のみや」と「きえなむ」「かへらむ」の三字相異、

る。従つて平仲物語から言つても後撰集、大和物語と何等の關係はなく、平仲物語に依拠は専ら貞文自筆の物語的日記的
 家集にあり、更には貞文自身の体験に基くのであつて、決して平仲物語編纂のために諸家集、諸歌集、諸物語等が参照されてそれに依拠して仮作された等とは考へられないのである。伊勢集も貞文に関する条の限りでは後撰、大和と關係なく、平仲ともその立場が正反対であるから伊勢自身の体験に依るものと想はれる。(この家集は平仲説話に關係なき故畧す)

三) その性格

第一期(発生期)の平仲説話(平仲物語、大和物語)が形成してゐる世界、そこに漂ふものは、或は憂く辛く或はあじきなくすさまじき或はのどかにうら楽しいが又やるせなくもあると言ふ、未だ貞文の生に即した沁々とした人の世の感動なのであり、大掴みにいへば「あはれ」の世界である。例へば平仲(廿六段) 志賀へ参詣の道すがらほのかに心交した人はあらぬ中傷を信じて姿を隠して了ふ。やるせない思ひで男は夕暮の前栽を見やりつゝ「たすくへきくさきならねとをばれとものおもふ人のめにはみえける」と微吟してゐる。月も登つた。親身な友の誘ひのまゝに心も慰むかと月明の都大路に駒を並べて西の京へと志す途中も「志賀の事のみ恋しかりければ女はじめ言ひたる歌(あふさかのなにしたのまねせき川の流れておとにきく)をふりあげつゝかひ歌に歌つてゆく中、コトリ〜と先に

立つて行く女車があつたが朱雀大路にさしかゝつた頃思ひがけなくその車から「この言ひ人さだけき歌をぬすみて朱雀にてしも歌ふ」と言ひ寄越す。男の胸の鼓動はハツシと止つた。今の今まで行方を尋ねかねて術もなくあの時贈られた歌を歌ひながら沁々恋ひしのであるたその人に月明の朱雀大路でこの様にゆくりなくめぐりあはふとは、儚く切ない夢の様な悦びに男は直には口がきけなかつた。月影に男の横顔はしつとりぬれた様に光つてゐる。うれひ、さびしみ、よるこびの溶けあつた感慨(おも)がさ霧の如くほの〜とたちこめてゐる。あはれの世界である。又後世の平仲説話ならば好んでそのをこぶりを誇張もしをしろをかしく詳述したであらう貞文の名を騙られてうかと男にあつた女の話でも、男(貞文)は自分でない事を(女友達の疑をはらす必要から)明らめるだけであり、贈つた歌に対し「女はおもひはちてかへり事もせず」と結び女を揶諷、侮蔑乃至嘲弄したりしないのである(平仲廿九段) 又無教養な「上達部めきたる人の女」の話(平仲十九段)に於てもその度外れた無教養さが分つた時一応呆れはしたがその女に對する嘲弄よりも、さうとはしらず夢中になつてわび歌に憂身をやつし、自分の風評でも耳に入つての無返答かと氣をもんだ自分自身を苦笑しつゝふりかへるのである。仇々しい愛人がその邸から他の男を出す現場をみせつけられ「限りなくうじてものいはず」とその恠しさを語るけれども男のまのわるい役柄ををこなるものとして笑ふ事はない。当期の平仲説話

は貞文と共に沁々とその生を辿つて寂しい人間存在が味はねばならぬ「うれひ」「悦び」「わびしみ」の世界をさまよふのである。その好例は「国経大納言の北方の話」である。本期の国経北方にかゝはる平仲説話は、貞文が忍んであつては行末を契つてゐた不遇の人妻が一朝にして時の絶対権力者時平の室となつた時、女をも早別世界の人と見なければならぬ現実の冷厳さの下で諦めきれぬ切なる思ひをほつと洩す吐息と共に詠み出でた嘆きの歌を贈る、そこに話の重点がある。

これが後世の同説話では時平の狡猾鮮やかな奪取ぶりに重点が置かれ、国経も貞文の嘆きも消されて了ひ彼等はをこなるものに近く軽くあしらはれてくるのである——をかしくをもしろき世界の形成それと対比する時一層初期の平仲説話が志向乃至形成してゐる世界は貞文の生に即した「あはれ」のそれである事がうなづかれると思ふ。

第二期貞文歿後五十年より百年の間 974 ~ 1024

拾遺和歌集(貞文歌)、源氏物語(末摘花)が本期に現れた関係文献である。

(一) その種類

前期の平仲説話の種類に添加される新説話

(a) 平仲墨塗り話(の片影)

源氏物語(末摘花)

右一種である。(拾遺集貞文歌中二首は、(a)伊勢との話、(b)

失官事件の話、に属する歌であるが単なる歌、詞書であつて問題にならない)源氏物語 末摘花「髪いと長き女をかき給ひて鼻に紅をつけて見給ふに……と御硯のかめの水に陸奥紙を濡らし寄りてのごひ給へば平仲がやうに色どりそへたまふな……」、

若紫「さも移りゆく世かなとおぼし繞くるに平仲が真似たらねど誠に涙もろになむ……」(吉沢氏対校源氏物語本)の条は河海抄に

「宇治大納言物語云平定文女のもとにゆきてなくまねをして硯の水入れをふところにもちて目をなんぬらしけるを女心えてすみをすり入たりけるをしらて又ぬらしければ女饑をみせてよめり 我にこそつみすれとも人にすみつ (国文註釈) らさは君が (全書本)

とある平仲墨ぬり譚を確に背景にしてゐると思はれるからである。

(二) その依拠

此の平仲墨ぬり話の典拠はどこにあるか。第一期には見られぬ説話である。恐く巷間の噂話—人、処、時をふるにつれ事實は誇張されより喧伝価値の大なるものとなつてゐる—に源氏は依つたものであらう。大和にも現存の宇治大納言物語、宇治拾遺物語、今昔物語集等にもない話であり、結局平仲墨ぬり譚は巷間に生れ巷間に消えた針小棒大の作り話である。

つたのではあるまいか。丁度平仲が本院侍従に懸想する話が伊勢と平仲との「見つとそいひやりける」から異常な發展をして出来上つた如く初は凡そ墨ぬり譚とは似つかぬ事實であつたのではあるまいか。

(三) その性格

源氏物語末満花では元談に源氏が空のごひをして紫上にみせると紫上が硯のかめの水で濡らした紙で拭うので「おや硯の水入れてぬらしましたね平仲みたいにとんだ墨ぬりをなさいますな……」と「たはぶれ給ふ」、元談、笑ひの対象として平仲墨ぬり譚は扱はれてゐる。此の期では、平仲説話は「をかし」の性格をもつそれとなつてゐる。当時他の平仲説話も行はれ従つて第一期の性格をもつものもあつたわけであるが、第二期になつて出現した平仲説話は既にかゝるをかしきくじり話として形成されて来たのである。

第三期貞文歿後百年より二百年迄 1024 ~ 1123

古今和歌集目錄、今昔物語集（宇治大納言物語）等が三期にあらはれた關係文献である。古今集目錄は貞文の系譜閱歴を記すのみである。今昔物語集は本格的説話集でこれが平仲説話を藏してゐる。

(一) その種類

(イ) 会平定文女出家語

今昔

(*) 時平大臣取国経大納言妻語

今昔

(*) 但し(イ)の 平定文假借本院侍従語

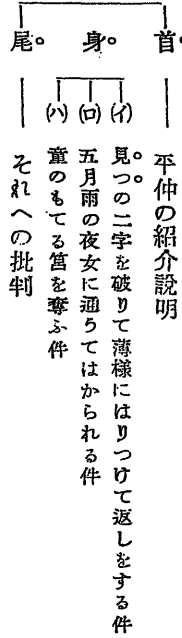
今昔

右の三種であり、それらは第一期の(イ)武藏守女、(イ)国経北方、(イ)伊勢(見つといひやりける女)の系統に属する。—その發展せる或はそれにかゝはる事により派生せる説話である。更に河海抄所引宇治大納言を此の期に存したと假想すれば、(イ)墨ぬり話も亦存するわけである。勿論大和以下一期の平仲説話も行はれたと想はれるが平仲物語は埋もれかけたらしい。

(二) その依拠

今昔物語の(イ)類は第一期の(イ)類(大和物語)に依拠してゐる——説話の構成筋の進行が全く同じで大和の説話の冒頭「平仲が色好みけるさかりに」の平仲を説明した部分「平ノ定文ト云フ人有ケリ字ラバ平仲ト云ケリ」を首に附加し尾に平仲の行動並に女の運命に対する批判、所感を添へた迄である。「司のかみものへいます云々」は今昔の見落しであらう。細部に至る迄酷似してゐるから——と思はれ、別系の平仲物語の(イ)類には依拠しないと思はれる。今昔の(イ)類と第一期の(イ)類(大和物語)と比較すれば、今昔の(イ)類では、まくらとも称すべき延暦の美麗停止事件が語られ次に愈々主題たる話——(1)時平が平仲に国経北方の美容を確かめる、(2)時平の北方奪取——に入るのであつて今昔では奪取後平仲と北方との交渉如何については一言も

費さない。従つてこれを物語る第一期の(イ)類(ロ)後撰集、並に第一期(イ)類(イ)大和(國経北方時代の交渉を語る)とは今昔の(イ)類は全く異なる。従つて今昔(イ)類の本拠は第一期の(イ)類にはなく、それから拵つた巷間の噂話にあると見るべきであらう(美麗停止の件は大鏡にも)。次に今昔の(イ)類の依拠を考へる。平定文假借本院侍従語の構成を示せば



もとより本説話は事実に基くものではない。既に鈴木脩一氏が「本院侍従放」(国学院雜誌)に述べられた如く貞文歿後(全は歿年を延喜)延長元年(古今和歌)乃至六年(歌仙)頃に本院侍従は出生したので両者間に假借關係はなりたくない。ではこの今昔の話は如何にして形成されたか。鈴木氏は(紙面の都合上要)Ⅰの(1)本院と本院の混同、Ⅰの(2)後撰集に本院侍従の歌の次に定文が本院北方に贈れる歌がありこれに本院の大臣云々の長い詞書が附されてゐる為(1)の誤解を助長してゐる。Ⅱ本院侍従の恋人仲文(國茂)と定文との混同(仲文は平仲といはれてをり貞文も平仲故誤ら

れ)。とあげてをられる。(但し仲文(國茂)は藤原であり平仲と呼ばれた)。とあげてをられる。(ばれてゐたと全氏がいはれるのは何にであらうか)しかしそれだけではこの「平仲假借本院侍従語」は出て来ない。更に前掲本説話の構成を見ても分る如く、(イ)の部分は明らかに、(Ⅱ)第一期(イ)類(イ)伊勢(見つといひ)と平仲との關係を語る説話——の誤伝に依拠してゐる。即ち、第一期(イ)類(平仲物語)に「見つとそいひやりける」の一文があつた。これは(伊勢集)に「見つとそいひやりける」の一文があつた。これは男の切なる願——「見つとはかりのたまへ」に對し女が表面的につれなく「見つ」の二文字だけを書いて返しをしたので男はうんざりして了つた迄である。それが巷間に拡まるにつれ尾緒がつき詮策好きになり遂に男が手紙に認めた「見つとたにのたまへ」の「見つ」二文字を女は破りつつ薄様にはりつけて男に返す程繰つてくる。同時に女が伊勢だつたか誰だつたか分らなくなる。他方時平が平仲(男)の恋人(後の本院北方)を奪取した話が巷間にもはやされる中時代は段々隔り処も人も移りかはる。その中に仲文、伊尹を愛人にもつてこれ亦幾多の情話を蒔き散らす本院侍従が巷間の話題にのほる。平仲に「見つ」といひやつた女(伊勢)も平仲を袖にした女(本院北方)も此の本院侍従も同じ女性の様に思はれて来るし平仲(貞文)も仲文も混同されてくる。此の時期が凡そ貞文歿後百年より二百年位のところであり、當時の世間流布の説話に依拠して成つ

たものが今昔の「平仲假借本院侍従語」であると思ふ。即ち本説話の骨子たる(イ)(ロ)(ハ)の各部分の源流を探せば、(イ)は平仲伊勢二人の情話の誤伝の大咄化に源がある、(ロ)(ハ)は本院侍従にかゝるはる話(或は相手は仲文か)の大咄化されたものに求められ、それらの混同され大咄化された当時の平仲説話に今昔は依拠した迄である。

(三) その性格

(イ)類(国経後に本院北)は表題(時平大臣取国経大納言妻語)が示す通り時平が北方を騙取する経緯を主題としてゐる。その関心、興味は専ら、時平が北方の容色の美を確かめ、巧に事を構へて行く鮮やかな手並、意驕り心昂ぶつた権力者が柔々とその力を活かして計画を成就する快さに置かれてゐる。被害者国経に対しては自ら「嗚呼。ニモ有亦難レ堪クモ思ユ」と彼に憐愍同情を示しつつもその好人物さ間拔けさを感じずにはゐられない。劣者をあはれと見る以上に「をこ」と見る態度が先行するのである。こゝでは平仲の役は一層副へ物となつてゐる。北方の美貌の証言者たる「介の無力な好色者として遇される。こゝが一期の(イ)類説話と著しく相違するのである。一期の(イ)類の(イ)(大和)では恋を阻まれた平仲の心情に関心があつた。そしてそれは「あはれ」の世界であつた。然るに三期の(イ)類今昔は平仲の心情には無関心であり、世界は時平の

意気揚々たる心情が醸す「をかし」の景囲気である。国経は好人物で無力でをこなる振舞をし、平仲は女流の事に精通した無力な好色者で権門に出入して利用されるもの、極言すれば一種の幫間的存在の性質をすら帯びて来、これもをこなるもの視されてくるに到つたのである。(ロ)類今昔「平仲假借本院侍従語」は一期の(ロ)類より派生し、(ハ)類及び本院侍従關係の話が混同されて生成したのであつてその事実が三期の(イ)類の性格を暗示してゐる。一期の(ロ)類は(平仲)男が「にくし」と思ひはてぬものから「つれなき女に怪しきめを見せられ乍ら思ひ切れずに物言ひかゝづらふ切なく怪しい沁々とした景囲気、あはれの世界を創り出してゐた。然るに三期の(ロ)類は面目を一新してゐる。一期で大切であつた男平仲や女伊勢の心情は三期では誰でもよい好男とすけない女との事件に移行してゐる。前述の様に「見づ」と返事しただけが三期では切り取つて薄様にはりつけると言ふ手のこんだ仕事、同様に五月雨の夜のしくみ、童のさゝげる筈のしくみ、何れも同断である。世の好色者を完全に抛つた女の奇抜巧妙なトリックの寸分狂はぬ成功の「おもしろさ」それに弄れる男の「をかしさ」病みついて死に至る「をこさ」に三期の狙はあり一期の「あはれ」とは対蹠的である。時平の計といひ平仲、国経が演ずるところと言ひそれは貴族的物語の世界ではなく庶民的な説話の世界であり、「をかし」「おもしろし」の性格がその特徴

である。更にその終尾に「平中病付リニケ然テ惱ケル程ニ死リニケ極テ益无キ事也男モ女モ何カニ罪深ケム然レバ女ニハ強ニ心ヲ不ニ染一マジキ也トツ世ノ人謗ケル語リ伝ヘタルトヤ」と書き添へずにはゐられない。即ち興味ある話をするのみでなく倫理的宗教的批判乃至教訓性を帯びてくるのである。(イ)類は全く一期の(イ)類に依拠するが、一期の(イ)類——人の世のあやにくさ、偶然が惹きおこさせた悲劇を沁々もの語る——にとどまる事なくその終末に「此レモ男ノ志ノ无キガ至ス所也何ナル事有トモ此ル事有ト云ヒ遣ハ安ベキ事ナル然モ不レ云テ五六日ヲ経レバ女ノ心ニ疎シト思ハム理也但シ女ノ前ノ世ノ報ノ有ケレ此レニ依テ此ク出家ニコソハ有ナム語リ伝ヘタルトヤ」と當時者の行動に對する批判及び一種の人生觀運命觀による己が解釈を施さないではゐられない。即ち、倫理的宗教的批判性、教訓性をも帯びて来た。「あはれ」で終始する一期の態度から少しずれて来るのである。以上要するに第三期の平仲説話は第一期のそれが「あはれ」の性格をもつに對し、「をかし、おもしろし」の世界へ移行し、同時に教訓性、倫理的宗教的批判性、解釈性をさへ帯びて来たのであり、かうみてる時第二期に見かけられた性格は、三期に至つて圧倒的となつた「をかし」の萌芽であつた事が分るのである。

第四期 歿後二百年より三百年迄

1124—1223

嚴密には言へないが、早くて第三期末、凡そ本期に位置すると思はれるものに、宇治拾遺物語（万治二年刊）、宇治大納言物語（天明六年刊本の原本）、並にそれにはするもの一例へば世継物語等、及び新古今和歌集がある。

(1) その種類

(イ)類 国経北方にかゝる話

四期の(イ)類説話は、宇治大納言物語「国経卿の北の方の事」、世継物語「今は昔国経大納言と申す人云々」の条、であり次の部分から成立する

○（無シ 美麗停止の件）

(イ) 時平国経大納言北方の容色を平中に確む

(ロ) 時平、北方を奪取する件

(ハ) 平中、北方に歌を贈る件

(1) 奪取事件の折、平中歌を車に入れる

(2) 後日平中と北方と歌贈答

(セ)類 本院侍従にかゝる話

四期の(セ)類説話には少くとも二様の系統があつたと想はれる。即ち、宇治拾遺と世継物語とは説話が異つてゐる。その構成と比較すれば次の通りである。(宇治大納言(セ)類なし)

宇治拾遺物語

ア無し

イ 五月雨の夜の事件

○ 四月のつこもり比

○ 女のあはざりし弁解の詞

「何しにかすかきん婚らんとせしに云々」

ウ ひすましのもてる物を奪ふ事件

件

○ 平中隨身に樋洗のもちゆく

かはこを奪はしめる

(結び) 「へいちうみそかに人に忍ひてかたりけりとそ」

世継物語

ア 見つ事件 あり

イ 五月雨の夜の事件

○ 五月廿日の程

○ 無し

ウ ひすましのもてる物を奪ふ事件

件

○ 平中自身で はこを奪ふ

(結び) 「いかてか物いはてやむへきとおもひけるに病になりけるとそ」

(め)類 仇なる女にかゝはる話

新古今集に一首採択されてゐる平貞文の歌及び詞書は、第一期平仲説話中(め)類説話の片影を留めてゐる。本歌は第一期の平仲物語第三十五段中の歌と少異(新古今の四句かけつゝ、誓へ、平仲かけて誓へ)をもつが、その詞書は平仲物語第三十五段前半の内容を簡約に表現した趣がある。

その他、源大納言隆国著宇治大納言物語も未だ世に存してゐたらうと思はれ、「墨ぬり話」も恐らく行はれてゐたであらう歟。今昔物語集も勿論存してゐたらうから同書所収の平

仲説話も汎く世に知られてゐた事と思はれる。

(2) その 依 拠

(め)類、今昔物語集にはその首の美麗停止の件があり、尾の(ハ)がない。従つて宇治大納言物語、世継物語は今昔物語集とは別系の、恐らく巷間の噂話に依拠すると想はれる。(+)類は、世継物語は今昔物語集と殆ど同一であるから今昔物語集系の説話に依拠してゐる。宇治拾遺は今昔とは異なるから、別系の恐らく巷間の噂話に依拠するのであらう。(ハ)類は平仲物語か、貞文集か或はそれらの断簡が伝承されたものか、とにかく平貞文の家集(日記的物語歌集的)の系統をくむものに依拠したと想はれる。

(3) その 性 格

今昔物語集に見られる教訓性宗教性は無い。興ある話をする態度、殊に宇治拾遺は、殊更情趣深く話さうとする意欲が明らかに窺はれる。が内容そのものはあくまでも「おもしろく」たくまれた話であつて、貞文の生を沁々と観る、語る——第一期の態度——ではない。主人公貞文は「をこなる」役割を演ずる「へいちゆう」、我が稀有珍奇の失敗を「忍びて人にかたりける」とか、その為に呆然となつて、「病みにける」といふのであつて、をかしをかしの性格、しかもおもしろをかしをかし、近代的な滑稽的をかしをかしに近似する性格の話となつて

ゐるのである。

第五期 履後三百年より四百五十年 1224~1378

当期になつて現れた貞文関係文献としては、紫明抄、異本紫明抄、河海抄、十訓抄、夫木和歌抄、続後撰集、続千載集、新千載集、新拾遺集等がある。

(1) その種類

(イ)類、五期の(イ)類説話は十訓抄第五に「大和物語に云々」と極めて大摺みの大要を述べるのみ。

(ウ)類、十訓抄に「みあれの真旨本院侍従云々、いと深く用意して遂に心おとりせられす云々」と一層簡畧に語る。

(ク)類、十訓抄第六の説話構成を示せば、

- 1 ○時平、北方奪取
- 2 ○国経、歎きの詠歌（思ひいづるときはの云々）
- 3 ○時平、兵衛佐貞文の妻本院侍従を奪取
- 4 ○貞文、本院侍従と歌の贈答

（昔せしわかかねことの云々
うつしにてたれちきりけん云々）

即ち、二期三期四期何れの時期の(ウ)類とも全く異なる、時平の美麗停止事件（今昔の）もなく、時平が北方の容色を平中に確める部分（今昔、宇治大納言の）もない。しかも宇治大納言では貞文の詠歌となつてゐるものが国経の歌となり、又、宇治大納言などでは貞文と北方との贈答となつてゐる歌が此処では貞文

と本院侍従との贈答歌である。

(ウ)類と(イ)類との混同が見うけられる。

(イ)類、河海抄に宇治大納言云として平仲墨ぬり譚をのせてゐるからその院者間には同説話が再生したであらう。

その他、河海抄に平仲物語二十六段の歌を貞文日記云として出してゐる。当時貞文日記（平中日記、平仲物語）が存し、今昔物語集、（隆国著宇治大納言物語）、宇治大納言物語、宇治拾遺等も行はれてゐたと想はれる。猶、御巫本大和物語（或はその依拠した大和物語）に平仲物語から九つの章段が抜書して添加されたり、大和物語抄の著者が見た一本が平仲物語から数段を採取附加したりした時期は恐らくこの時代あたりであらうと思はれ、又、平仲物語（貞文日記平中日記）が零本化し断簡となりつゝあつた時代で、完本を所持乃至披見する人々は極く一部分で世間には殆ど平仲物語は影を没しかけてゐたために第一期の平仲物語は伝承されず、大咄化されをもしろおかしく作り出された平仲説話が当時十訓抄その他に收められたと想はれる。

(2) その依拠

大和物語に依拠するもの、十訓抄第五には「これも大和物語に云々」と明言してゐる。従つて(イ)類が大和に依拠する事は自明である。(ウ)類は事件の大要を述べるだけであるから何に

依つたか確然としないけれども隆国著宇治大納言物語、今昔物語集、宇治大納言等の系統の說話——(巷間の伝承、筆録さ)にれたものを問はずよるものと想はれる。(㉒)類は全く大和物語の(㉑)類を承けぬ別系のものであり、今昔、大納言その他とも後半が異なる。今昔系、大納言系、後撰系等種々の系統の(㉑)類が巷間で錯誤され敷衍され附加されて出来上つたものらしい。それを承けて筆録したものであらう。これと言ふ記録のものにでなく巷間の說話に依つたと見ておきたい。

(3) その性格

本期の說話は、十訓抄について観る時、著しく說話は簡單であり說話自体への興味は乏しくなり副次的なものとなつて、教化教訓性が主となつてゐる。平仲說話の首尾に例へば○(㉑)類時平はすべて驕れる人にておはしけるにや云々○(㉒)類又すきものなればとて一筋にめて、近づくへきにあらす云々(以上首)○(㉓)類…いと深く用意して遂に心おとりせられすいやまさりに覺えけるとなん色好むといふはかやらのふるまひなり、平中といふは中将にはあらず兄弟三人ありけるか中にあたる故なり、(㉔)類…かゝれば女は能く進み退き身のほとを案すへし、すへて父母のはからひに随ふへきなり我といたしつる事はいかにも悔しき方ありとなん(以上尾)と言ふ風に教訓乃至教養を与へようとする、即ち倫理的乃至文化的に指導せんとする性格が顯著である。同時にそれは、「平中とは中将にはあらず」の如く考証的興味、性格も認め

られる。これ即ち三期の今昔物語集以下にみたところの性格、教訓性、批判性の發展であり次期の考証、註釈的性格の萌芽である。

第六期 歿後四百五十年後千三十年(現代)迄 1374~1954

本期には前期以来の今昔、宇治大納言、宇治拾遺、十訓抄等が世にもてはやされ、又難波江、碩鼠漫筆、拾芥抄、類聚名物考、作者部類等々に貞文の事蹟が考証、伝承された。更に大正十年には芥川龍之介の創作「好色」、昭和二十五年には谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」が世に出た。種類は従つて、(㉑)類(㉒)類(㉓)類等が主なものである。依拠は芥川の「好色」は今昔に依り、谷崎は上掲の諸本に求めたと想はれる。性格としては、前期の考証的性格が更に顯著になり註釈的考証的教化的興味が凝集して殆どその専門書ともいふべき難波江、類聚名物考以下のものに平中說話がとりあげられ考証されるに到つたがその為說話ではなくなつて、その反面純然たる説話的興味に基づく作品「好色」「少将滋幹の母」が現れ、そこでは平中は決定的に「好色家」の代表者とみられ、昭和の研究者の中には好笑家の類とさへ理会する人も現れて、をかし、近代的意味のをかし性格を圧倒的に平仲說話に附与する向きも存在してゐる。と同時に、「少将滋幹の母」の平仲解釈にみるやうな沁々とした感慨と王朝的輕妙洒脱さをもつをこならざるすきもの平仲像を近代的な心理解剖

の果に描かうとする行き方、一期の平仲物語に或る近似をさへ感じさせ、殆ど「あはれ」乃至「をかし（王朝的）」の性格と呼ばれるものゝ再現をさへ見るに到つたのである。

結 び

平仲説話の展開をその性格の面からみれば、第一期における平仲説話の「あはれなるおもしろさ」は年時をよむにつれて影がうすれ、遂に「をかしきおもしろさ」へと変質してしまふのである。第三期以後にあつては平仲説話と言へば「をかし（可笑的性格）」に属する面白味を狙つた説話と思はれるやうになつて了つた。同時に、第一期では唯「あはれにおもしろき話」で終始したのであつたが第三期以降は「をかしおもしろき話」である事の他に、話の内容に対してかくあるべし、かくあるべからずと言ふ批判性、如何に行動すべきかと言ふ教訓性、又何故かくかくの運命に立ち到つたかと言ふ仏教的（因果観的）解釈性並に主人公の氏素性を詮策する考証等の諸性格を附帯して来る。前述の処では、数多くの平仲事件（平仲主人公とする種々の事件、事態）の中から各時代がどの様な性格の説話をとつてゐるか、（例へば一期二期で採択されず三期四期で大咄化してとりあげられる）によつて大掴みにその期の平仲説話の性格の変遷を具さにみて来た。今、そのやうな性格の変遷——「あはれにおもしろき」より「をかしくおもしろき」への移行

は何故行はれたかについて考へてみよう。それは主體的内在的の面と環境的外在的の面とより見なければならぬ。即ち、先づ平貞文の生それ自身に平仲説話をしてさう展開させるところのものが内在してゐたと思はれる。それは彼が政治家でも武者でも又、學者でも仏家でもなく実に芸術の士、歌よみ、すぎもの——ものゝあはれをしる人、人間より山川草木鳥獸に至る迄その魂にふれうる能力をもつた人、ことに人と人とのあはひ、就中恋において繊細な感性をなへてゐる人であつたからである。とりわけその「すぎもの」の生は頼りない「程淡々たる「すさび」の生であつた。それは「をかし」へ近づく事の容易な或る「かるみ」をさへ帯びうるのであるから。芸術的な生、すぎものゝあはれしる生涯は環境（外在）的にみれば平安朝初期中期においては、伊勢物語の業平、源氏物語の光る源氏及び紫式部がその典型的なものとされる如く、最も高く価値づけられ理想視されてゐたのである。然るに時代が降り異つた環境においてはそれらの生に対して異つた理會、評価をする。即ち、「すぎもの」は平安末期（三期以降）以来単なる好色家にすぎなくなつて了つたのである。平安末より鎌倉へかけて隆盛を來した仏教により、又徳川三百年を支配した道德にとり異性への思慕はも早恋ではなく「色」として理會され、結局「迷妄」であり教、道の妨に外ならないとされるに到つた。寶物集に「マチカクハ紫式部カ夢ニ虚言ヲ以

源氏物語ヲ造シ故ニ地獄ニ墮チ苦ヲ受タリト見ヘシ故ニ早源氏物語ヲ破リ捨テ、一日経ヲ書テ喧ヘシト云ケルトテ歌詠ミ共集リテ務ヲシテヘリ云々、古事談卷二に「業平朝臣盜ニ三条后一宮仕以前將レ去之間兄弟達昭宣追至奪返之時切ニ業平之本鳥云々仍生レ髮之程稱レ見ニ歌枕一発ニ向関東云々」鴨長明無名抄小野小町事一全上の事見ゆ」と述べられてゐる所を見れば、平安末期では紫式部も業平も壇上から引きずり下され、地獄に墮ちたとか髻を切られて髪をのばす為の東下りであつたとか嘲弄される対象になつて了

つてゐる。かく見て来る時、平仲が全く無関係の本院侍従に懸想してをこ極まる振舞をしたと言ふ風に嘲弄される対象に作りあげられたのは、即ち「あはれにおもしろき」平仲説話が「をかしくおもしろき」平仲説話に變質移行したのは、平仲自身の生にさう理會される「かるみ」も内在しはしたが、より以上に時代の好尚乃至風潮が有力に活いてゐる事が看取されるのである。